B 138　久能山東照宮の衣服の遺品について、
—— 徳川家伝来の具足下着 ——　（第6報）

福島大教育　　栗原澄子、

目的、安土桃山時代から江戸時代までの武家衣服には、どのような衣服があったか、裂地・形態・縫製……などはいかようであったかを調べる。

方法、久能山東照宮に収蔵されている具足下着と考えられる遺品類を対象としに実態調査をした。

結果、4代将軍家綱の弟である徳川綱重と6代将軍家宣の所用と伝えられている具足下着6領である。裂地は、いずれも麻が用いられているが、なかには襟又は袖口などに金襴が使用されているものもあった。色目は、白や浅葱の無地が多く、なかには縹の小紋文様の仮品もあった。形態は、袖付け・袖無し・身頃に籠手を着けたような仮品までであったが、大別して3種に分けられた。また、麻裂であるが単の仮品ばかりでなく、裏で引き返した袷仕立の仮品もあり、いずれも縫製方法は緻密で、熟練された技法で、陣羽織と同様鎧司によるものと考えられる仮品である。